

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止



うら
アストラ!?

妹はお風呂嫌い
で
女王は珈琲が
好き

添牙いろは
イラスト…兎丸ゆゆ

うらアストラ!?

妹はお風呂嫌いで 王女は珈琲がお好き

添牙いろは

目次

登場キャラクター紹介.....	5
妹はお風呂が嫌い.....	49
王女はおまじないを信じない.....	91
妹は朝早い.....	125
王女には自覚がない.....	159
妹はモデルになりたい.....	195
王女は全裸で町に出る.....	227

登場キャラクター紹介

私は、ベッドで横たわっていた。

しかし、いつもと環境が違うからか、妙に気分が高揚しているのが自分でも判る。少し退屈していたところだ。いい機会だし、暇潰しにこの熱に身を委ねてみるのも悪くない。

普段は穿く機会のないミニスカートの腰を緩めると、行儀悪くモゾモゾと踵の方へと追いやった。素足に掛かる軽くもない掛け布団の肌触りが、今日はやけに艶かしく感じる。

この感触を上半身にも欲しくなり、私は着ていたチュニツクを、やはり布団の中でモゴモゴやり、それを枕元へと丸めて捨てた。

下着や、それに準ずる服装で寝ることはそう珍しくもない。だが、この興奮はどうしたことだろう。カップの上から中身を揉みしだいているだけなのに、これまでにない背徳感が胸の中でゾワゾワと渦巻いている。

私はすぐに下半身に指が欲しくなった。軽く足を開き、その中央を指でスッと撫でると、下着越しだというのに、ひんやりと湿っているのが指先に伝わってくる。

下から、上へ。

指の動きは、いつしか磨くような上下運動となり、その強さも、柔らかな奥へとめりこませるものに変わってゆく。

「ん……ふう……」

少し息遣いが荒くなってきたか。

私はうつ伏せに姿勢を変え、枕に向かって吐息を零す。

尺取り虫のように腰を上げると、お尻に掛け布団の重みが垂れ下がる格好となった。それが何だか酷く厭らしく思えて——興奮の昂りは、そのまま指の激しさへと変換されてゆく。

「んっ……んん……、んふううう……っ♡」

もつと奥まで触りたい。下着が邪魔だ。もう脱いでしまおうか、と手を掛けようとした時——ノックも無しに部屋に入ってくる者があった。

しかし、私はこの非紳士的な無礼者に対して腹を立てたりしない。

何故なら、ここはその非紳士的な無礼者の私室なのだから。

「陛下!？」

部下の前であまり情けない姿を晒すものではない。私は焦らず優雅に、ゆったりと腰を伸ばし、布団を剥がしながら身を起こす。

そしてベッドの縁へと座席を移し、足を組んで彼を見上げた。

これが彼の、私生活の服装か。寝間着というより、だらしない古着である。そんな姿ではあるものの、口調や仕草だけはいつもどおりに。

「王女陛下、どうしてこんなところに……？」

私の下着姿を見ても動じないとは慣れたものだ。驚きのあまりただただ青くなるばかりの宰相・ライナックは、私の足裏の前——ベッドの下に恭しく跪く。

正直、そういうのはやめて欲しい。

「どうしてって、貴方の帰りが遅いからよ」

私が彼に与えた休暇は三日間。それなのに、実家であるこの孤児院に帰ったライナックは一日延泊する旨を一方的に通告してきたのだ。無論、そんなものは許されない。彼は、基本的に仕事をサボリたがる。その彼が、四日も仕事から離れれば、もう二度と働きたくなくなるに違いない。

『乞食も三日すれば忘れられぬ』

この言葉をライナックに送るため、上司である私が、官邸を抜け出してコッソリ来てやったのである。手遅れにならないうちに。

この合鍵は、以前彼にムリヤリ作らせた。それを使い、住人の夕食時を見計らって裏口から忍び込み、こうして彼の匂いに包まれながら自慰に耽っていた——というわけだ。

ライナックは、突然の仕事場からの来訪者に落ち着かない様子。

「と……ともかく、今は服を着て頂けませんか……？」

何やら部屋の中を見回している。私が着てきた服を探しているのだろうか。しかし……

何をするために私がここまで来たと思っっているのやら。

それに、女が意味もなく男の部屋で下着姿を晒すはなからうに。

やれやれ……彼を家臣から男に戻すためには一手間必要か。

まったく、世話が焼ける。

こつちとしては……すぐにでも襲い掛かってきて欲しいのに。

キョロキョロと忙しなく視線を動かす彼の顎に、下からひよいと指を当てる。

そして、それを手繰り寄せるように、

ベッドの上から滑空するように、

彼の鼻の下へと顔面から突っ込んだ。

しかし、着地点を誤ることはない。

私の唇はしっかりと彼の唇へと降り立ち、その勢いのままに彼を床へと押し倒した。

すると……

「ん……んふ……ちゅ……」

ほら、こうして背に手を回して抱きしめてくれる。

舌だって滑らかに絡め取ってくれてるし。

「欲しいのでしょうか？ ライク」

彼も彼で、一国の宰相として、気軽に街を出歩ける立場にない。ゆえに、その身分を隠し、民の一人として振る舞う時の彼を、私はそう呼んでいる。

今は、大層な肩書なんていらぬ。
貴方も、私も。

ただの男と女となつて、

本能のままに性を謳歌すればいい。

だが。

人の本能は性欲だけでなく――

……クウ。

私のお腹が小さく鳴った。

「ああ、ライク、私、夕飯まだなのよ。悪いけど……何か持ってきてくれる？」

コンコン、と扉をノックする音は聞こえています。が、同伴者はそれに応じること
を許してくれません。二人で寝るにはやや手狭いベッドの中で、彼女は僕の身体を強

く抱きしめ——まるで唇に食らいつくように、僕の口を塞ぎ込んでしまいました。
寝たフリをしていなさい——そういうことなのでしょう。

「ん……………ちゅ……………ふ」

それは来訪者をやり過ぎたためか、それとも単に僕の舌を味わいたいのか——今となつては定かではありません。

しかし、それに応えているうちに、僕の方が彼女の温かく柔らかい口内をもっと欲しくなってきました。

外に音が漏れないよう身体は動かさず、それでも舌尖だけは激しく絡め合っており
ます。

「ちゅ……………ちゅば……………ぶちゅ……………」

自分の中に彼女の熱が加わると、頭の中だけでなく、腕の中、そして触れ合う下腹部まで温かみを求めてしまうようです。しかし、いま派手に動く、招かれざる客人に勘付かれてしまいます。

コンコン、という乾いた木を打つ音は、ゴンゴン、ドンドン、と徐々に物騒な拳打による衝撃へ。これは、日没後の静けさの中では迷惑な騒音になりかねない——と危ぶまれましたが、スツ……………とようやく収まってくれました。下階で安眠中の子供らに配慮してくれたものと思われれます。

そして、音源であろう主の足音が遠ざかることで、元の静寂に包まれました。

やっと二人だけの世界に戻れたというのに、何故だか彼女は不機嫌に見えます。静かに隣で手と舌を繋ぎ合わせていたのに、逆にそれを振り払われてしまいました。

そして、勢いよく掛け布団を捲り上げると——僕の上へののしかかり……！

「もう……こんないいところで……っ！」

静かに触れ合わせていた舌から送り込まれた熱は僕の股の間へと溜まり込んでいて、既に湯たんぼのように熱く、硬くなっております。

彼女は、自分の身体には生えていないソレを恥ずかしげもなく摘み上げ、天井に向けて先端を正しました。

「そんなに、我慢されていたのですか？」

目の色を変えてそこに跨がろうとしていた彼女でしたが——僕のこの一言で、頬の朱がみるみる白けていくようです。つい出てしまったいつもの口調が気に障ったのでしょうか。

彼女は下腹部の着地先を頂上から麓に変え、僕の腿の付け根あたりに腰を下ろしました。触れ合わされた肌と肌の間には、ぬるりとした彼女の粘液が挟み込まれ、それがすっかりとした骨盤を官能的感触へと変えてゆくようです。

ですが、いいところで水を差された彼女は、少なからずご立腹。先程のは……失言

でしたね。

「こんな時にそんな言葉遣い、やめてくれる？」

僕の上で、彼女はバツ、と両腕を開きました。薄暗い部屋の僅かな明かりさえも照り返すような白い肌は、何一つ隠すことなく僕の前に顕示されておりました。そこには、先ほど僕を摘み上げた時のような恥じらいの欠片もありません。こうして曝け出すのが当然、と言わんばかりです。

「こんな王女様、どこにいるの？ これのどこが王女なの？ 言ってみなさいな」
人前に出る時は頭上に掲げている冠も、

素肌を覆うシルクのドレスも、

権威を示すための宝玉の数々も、

先ほどまで身に着けていた下着すらも——

今の彼女の身体には見当たりません。ここにいるのはただの女——彼女はそう言うたいのでしょうか。

「ライク、私の名前を言ってご覧なさい？」

彼女の名はトリアンタ・フォン・ネイザールント。先日中途半端な形で復興を遂げた古代ネイザールント王朝の血筋を受け継ぐ王女陛下であります。

そして僕は、彼女に代わって国政の大部分を担う宰相、ライナック・ニュートラム。

しかし、彼女が僕を『ライク』と縮めて呼んでいる以上、ここでこちらがフルネームで呼べば、火に油を注ぐことにしかなりません。

ですから、僕が口にするのを憚られ——しかし、彼女が日頃望んで止まない名で呼びかけます。

「トリイ……ごめんね」

本来、王女陛下に対してこのように口を利いては、数少ないながらも確実に跋扈している血統原理主義者に肅清されてしまうでしょう！ ですから、滅多なことでの名はお呼びできません。

それこそ、お互い社会的立場を捨て去り、肌と肌で触れ合っている時くらい——でなければ。

僕からの詫言を受けて、彼女も機嫌を直してくれたようです。

「空腹で機嫌悪くなってるんだから、変なこと言わないでくれる？」

不貞腐れた文句を呟きながらも、先ほどから一転して顔中を綻ばせています。
ですが……

「夕飯ならさつき食べたばかりじゃ……？」

それを聞いて、彼女は舌を美味しそうにペロリと唇を舐めずらせました。

「上のお口は……ね？」

彼女が愛おしそうに撫で回しているのは——いわゆる、下の食事、ということなのでしょう……。

「こっちは長らくお預けだったものねえ……何年ぶりかしら？」

「……四日、じゃないかな」

僕の勤務は早朝から深夜に至り、就寝時には精魂尽き果てていることが大半です。

とはいえ、彼女も同じこと。

会見やら対談やらで疲労しているはずなのに——夜になると僕の布団の中に潜り込んでくるのだから驚かされます。

この時、ただの添い寝で済んだことなどないのですから——こうして抱き合っていれば、収まらない心情というのもあるのでしょうか。

「こっちは朝からその気だったのに、突然延期なんて言うんだもの。これ以上待てるワケないでしょ？」

年度末の繁忙期が過ぎたところで、お暇を頂いたのは三日ほど。本来ならこのヘニュートラム孤児院で、三日と言わず、恒久的にゆつたりとした生活を送っていたはずなのですが……先の内戦の折にトリアンタ王女陛下と出逢い、彼女のためにアレヤコレヤと駆けずり回っているうちに、気づけば宰相としてこのような業務に就かされていたのです。

彼女のための職務を忘れてはおりません。

ですが、この孤児院も内戦によつて新たな孤児が生み出され、急増した住人たちの手続きに追われておりました。

なので、一日だけ戻るのを延ばして欲しい、と秘書を通じて連絡したのが今朝の話。その日の夜に、まさか王女自らここまでご足労をかけてしまうとは。

勿論、単独のお忍びです。

この事が知れると、それなりに面倒なことになります。

「こんなところでこっそりしなくても、帰ってからすれば——」

親に黙って子猫を匿うような状況では、僕としても安心できません。こうなつてしまった以上、明日は皆が起き出す前に帰るつもりだったのですが……その帰るまでの僅かな一晩すら、彼女は我慢できなかったようです。

「嫌よ」

彼女はキツパリと僕の言葉を遮りました。

「何のためにここまで来たと思つてるの」

……どうやら、僕と身体を交えるために危険を冒してここまで来られたようです。かく言う僕の身体も、彼女の優しい手つきによつて、更なる高みを欲してしまっています。彼女に跨がられるまでもなく、こちらから押し倒してしまいたい程に！

「私もう、お膾なかぺこぺこなよ。貴方の身体で満膾まんがくにしてもらうからね♥」
 空膾くうかくかん感に耐えかねたのか、彼女の下の口からは止めどなく涎が流れ出ています。目の前のご馳走を平らげるため、今度こそ席まに座り直しました。

しかし……あえて立てずに。

僕を押し倒したまま、割れ目へすっぽりと収めてしまいました。

ぺちヨリ。

今まで溢れなかったのが不思議なくらい、彼女の壺の中は蜜を湛えています。しかし、僕によってこじ開けられたことで、それまでテロテロと伝っていた中身が、僕を上からずぶ濡れにしていよいよです。

「ふっ……うふっ……ふふふ……ふふふ……♥」

腰を振って浅瀬を掻き回すのがよほど嬉しいのでしょう。彼女の上の口からは堪えないような笑みが溢れています。

「ライクの物欲しそうな顔したら……♥ どうして欲しいの？ 言ってみなさい」
 どうやら僕も同じような顔をしていたようです。

しかし、そのように言われてしまうと……抵抗してみたくなるのが人のサガというものかもしれない。

「これだけでも気持ち良くて……射精イッしてしまうかも……」

「えっ!? そんなのダメに決まってるでしょ!」

彼女は慌てて股の間に手を伸ばし、僕のアンテナを調整し始めました。しかし、先程と違って、彼女の滑りぬめによって感度が上がっており、そんな風に強く指先で弄り回されると、冗談抜きに射精イッてしまうかもしれません…!!

とはいえ、的確に探り当てればそう時間がかかるものでもなく。

「それじゃ、いただきます♪」

食前の挨拶を済ませて、ズっ、と腰を深く落としました。

「くっ……ふう……ふう……♥」

彼女の濡れそぼった膣内はまるで涎を垂らしながら大きな口を開けるように、僕の身体を何の抵抗もなくスッポリと包み込んでしまいました。膣奥おくまで届いたことで漏れた吐息が、とても艶かしく聞こえてしまいます。

「ああ……、やっぱコレよねえ……あるべきものがある、ってカンジ♥」

「満足?」

「全然!」

僕からの問いかけが弾みとなって、彼女は僕の上で飛び跳ね始めました!

「ぜっ……全然っ……ぜんっ……ぜん……ぜん……っ!」

僕の身体が押し込まれる度に彼女の言葉が途切れ、代わりに甘い鳴き声を響かせま

す。

膣^{おく}奥を突くごとに彼女の膣^{からだ}内がビクン、ビクン、と脈を打ち、

その芯への締め付けは収まることを知りません。

これに比例してジュブジュブと潤滑液も溢れ出してゆき、彼女のピストン運動はぎこちなくなるどころか、更に、更に、より激しく――

「もつとっ ♡ もつとっ ♡ もつとっ ♡ もつとっ ♡ もつとっ ♡」

決るように腰を捻りながら、彼女はリズムミカルに骨盤を打ち付けます。

これには、僕からも合わせて突き上げずにはいられません。

二人分の勢いが、僕たちの奥深くで混ざり合ってゆきます。

ピチャリ、と肌の間で雫が弾け、

身体を離せば名残惜しそうに糸が後を引く――

そして、その繊維を揉み解すように、再び彼女の重さが僕の上へと擦り付けられるのです。

下半身が動けば上半身も激しく揺らされ、細い身体に吊り下げられた豊満な二つの水風船が上下左右にブルンブルンと飛び跳ねています。

その先端は、はち切れんばかり迫力に対してあまりに控えめで、ほんのりと淡い色付けの前に、僕の手は本能的に誘われてしましますが――

爪の先が触れるか触れないか、というところで、彼女は胸を大きく反らしてしまいました。僕が求めていたものを取り上げるように。

「コラっ！ ナニ勝手に触ろうとしてるの！」

彼女は身体を揺するのを止めて、両腕で胸部を隠してしまいました。

恥じらっている素振りを見せつけるために。

あくまで、素振りを。

「触りたい時は……ちゃんとお願いしないとダメでしょ？」

僕と繋がったまま見下ろす彼女は、こみ上げてくる笑いが収まらないようです。それに、ヒクヒクと脈動する彼女の膺内ななかも。

自身も触られたい。

でも、こちらに求められたい。

そんな期待に満ちた眼差しを向けられては——応えないわけにはいきません、ね。

「トリイのおっぱいに触りたいんだ……いいかな？」

これに、彼女は笑顔を弾けさせ、僕をキュウウウ、と締め付けます。

が、未だ胸の覆いを解こうとしません。

「女の子にそんな恥ずかしいことを頼むなんて……ライク、貴方随分スケベなのねっ！」

非難しながらも——どうやら僕は彼女の期待に沿う顔をしているようです。続きを促すようにギョツギョと力が込められていますから。

だから、僕はそのまま——しおらしく目を伏せます。

「ごめん……スケベな男は嫌い……かな？」

どうやら、これにはくるものがあつたらしく——一気に膣内^{なか}を窄ませました。その胸の鼓動までもが響いてきそうです。

彼女自身も抑えられなくなり——柔らかな二房が僕の目の前に突き付けられました。「仕方ないわね、可哀想だからスケベなライクに付き合つてあげるわ。ありがたく受け取りなさいっ！」

僕の視界は薄暗く、たわわに実つたものになつてしまいました！

「おっぱいなんて触つて楽しいの？ ライクしたら子供ねえ……♪」

その果实をもぐように手で包み込むと、温かく柔らかかなところを存分に堪能させてもらっています。が、彼女は更なる刺激を求めているようですね。焦れるように啜え込んだ僕を、無言で催促しています。

そういうことなら……手の平で揉みしだきながらも、敏感に膨らんだところを二本指で摘み上げれば——

「っ！ ……何？」

快楽を喉で留めて、王女は優位な姿勢を維持しようとしております。が、僕の指攻めは確実に彼女の内側から侵食し、腰さえもムズムズと疼かせているようです。

とはいえ、王女にはもう少し素直になっていただきましょうか。でないと、こちらにもむず痒いままですのぞ。

右手は乳首に添えたまま、左の胸に頭を起こして……唇で、吸引——！

「ひゃうん♥」

これでようやく、上下ともに陥落させることができました。舌先でチョコチョコと擦れば、熱い吐息を吐きながら股をグリグリと押し付けてきます。

しかし……前屈みになったことで、少し浅くなってしまったのでしよう。臆奥おくに届かず、その手前でもどかしそうに身を振っています。

ですが、中途半端に着けられた炎は燻り続け——もう乞わずにはいられなくなったようです。

「ライクっ！ お願いつ！ 撞いて！ 下から私を撞き上げてエっ！」

悲鳴にも似た彼女の嘆願に、僕自身の欲望も膨れ上がり——懸命に腰を浮かせて彼女に自分を押し込みました！

「はうん……っ♥」

これまでにないほど性感カクセンじてくれたのでしようね。緩みきった笑顔とは裏腹に、下

腹部は僕をしつかりと締め付けています。

そして、その気持ちはこちらと同じ。ベチヨヌチヨと音を立てながら彼女の膣内なかを掻き回していきます。

「奥につ♡ 奥につ♡ 奥につ♡ 頂戴……っっ♡」

しつかりと骨盤を合わせた上で更に奥、となると——女性の器までも満たして欲しい、ということなのでしょう。僕の男性から逆るもので。

とはいえ——

王女陛下の出産ともなれば、内政問題にも発展しかねません。

慎重に執り行う必要があるでしょう。

ですが、そのような上っ面を取り除いた——裸の女性に求められては……！！

「全部っ、最後まで欲しいのっ！ ライクで……ライクの男のことで私をいっぱいにしてえっ♡」

「そんなに貪欲に迫られては……僕は……僕は……！！」

「射精……射精そう……っ！」

このまま膣内なかで……いや、それはいけない……！！

理性と本能が僕の中で拮抗しておりますが、彼女の一声によって——

「子宮なかにつ、子宮なかに頂戴っ！ ライクの赤ちゃんを全部……！！」

ドクンっ！ ……ドクっ！ ドクっ！
「ひゃっ♥ はっ…ああああん…っ♥」

……つい、揺らいでしまったようです。

しかし、もう取り返しはつきません。

ビクビクと腰を震わせながら、彼女の子宮おくに向けて堪えきれなかった欲望が射精はき出されています。

彼女に言われるまま、本当にすべてを。

後悔はないこともないので…

「はっ…あっ…あ…あ…♥」

満足そうな彼女の息遣いを感じていると……それも含めて支えていかななくてはならないのかな、と勇氣も湧いてきます。

が……？

ここで、王女は何か違和感に気づいたようです。

「ライク……私がない間、我慢してた？」

ギクリ!?

「何よ、その『ギクリ』って顔」

思わず表に出てしまったようです……！

「まる四日溜めた割には量が少ないような気がするんだけど……」

さすが……官邸にいた頃から肌を重ね合った仲です。こういうところまでお見通しとは……！

「一人で手の中に？ それとも、まさか……!?」

ガシャンっ！

物音に驚いて足下の方を見やると、壁に嵌め込まれていた窓が勢いよく開かれまして！

そして外から滑り込んでくるのは黒い影。

怪しくも慌ただしい騒音に、僕の上で腰を据えたまま王女も振り向きませぬ。

裸の二人の視線の先にあるものは……！

「コラー……!! あたしのお兄ちゃんにナニしてんの!!!」

僕の部屋の窓には鍵がありません。とはいえ、垂直に切り立った壁面の上空三階に位置するこの部屋に侵入できる盗人などいるはずがないのです。

そう、妹のホトを除いては……！

上半身を捻って呆気にとられている王女の身体を引つ摺むと、まるで置物でもどけるようにヒョイと持ち上げてしまいました！

男の栓が抜き取られると、通じ合っていた部分から白濁色の愛情がトロリと流れ出し、それを見た妹は――

「うわっ！ 何てことしてくれやがんの！ この……精子泥棒っ！」

この一言で、僕は全身から血の気が引いていくのが判りました。今まで力強く仰いでいたソコからも。

「ラ……ライク……っ！ 貴方……実の妹に……!？」

「いえっ！ あの……それは……!？」

実の妹ではありません！

ここは孤児院、血の繋がりなどないのですから！

彼女はただ、僕の妹分として子供の頃から仲良くしていただけの相手なのです。

その仲良くし方が、身体の成長に合わせて大人になってしまっただけで……！

妹は王女の身体をポイっとベッドに放り捨てました。

その軽さはクッションでも投げているかのようですが、投げられたのは人ひとり。足の上に迫り来る王女に潰される前に、僕は慌てて膝を折り畳みました。

間一髪、ボスン、と王女は布団の上に尻餅を搦きます。相変わらずこの妹には常識とか力学とか、そういうものが通じません……！

手荷物、を片付けた妹は、自分のパジャマに指を掛け始めました。お腹の上で留められているボタンは不精して外すことなく襟元から頭をすっぽ抜くと……胸は下着に包まれておりません。元々然程大きく膨らんでもいないので……こういうことも多いようです。

ですが、プクリとしたピンクの蕾だけは確かに芽吹いており、たった一枚を脱いだだけで、僕達の前に曝け出されてしまいました。

ゆったりとしたズボンもこれまた不精して、中に穿いていたパンツと一緒に足首までずり下ろしてゆきます。大切な秘所が顔になるにも関わらず、彼女の脱衣には躊躇がありません。

それもそのはず、兄に自分の裸体を見せることなど、今に始まったことではないのですから。

「ちよっ……貴女、ナニ脱いでんの！ まさか、私のライクとセックスするつもりじゃないでしょうね!!」

「あたぼうよ！ お兄ちゃんはんちんの先から精子の一匹まであたしのモノに決まってるっしょ！」

下世話な口論は結構ですが、時間は弁えてください……！

「声を落として！ 子供たちが起きる！」

こんなところを彼らに目撃されては、変なトラウマになり兼ねません！

僕に制されて少し我に返った妹は、無言でベッドの上によじ登ると、そのまま僕の身体に覆い被さろうとしています。

ですが、これを黙って見ている王女ではありません。自分の全体重を掛けて、妹をベッドの上から排除しようと試みています。

ところが……小さな身体に不可解な力を秘めた妹の身体は微動だにしません。彼女と何度も身体を合わせた僕ですら、彼女の筋力がどうなっているのか、さっぱり解らないくらいなのです。

そんな彼女の異常性が、どうすれば正常になるのか——僕はその経験上知っていません。僕は王女の耳元に唇を近付け、彼女にその方法をそつと囁きました。

「トリイ……あの、その……ごめん……。一度腔内に射精せば大人しくなるから……」

王女は、お気に入りの玩具を取り上げられた子供のように涙ぐんでいます。これには罪悪感も禁じえません。が……ここを静かに、穏便に済ますには、妹を止めておくしかないのです。

王女も官邸に黙ってこっそり抜け出してきた負い目があり、渋々僕を諦めてくれま

した。何も見ず、何も聞こえないよう、ベッドの隅で布団に包まってしまったようです。

「ん。解ればいいんよ！」

邪魔者を排除できた妹は満足気にベッドの中央に陣取り、僕に向かって大きく足を開きました。

「それじゃー、いつもの気持ちよくなる仲良し体操、お願いねっ！」

彼女の身体は見るからに細く華奢で、王女のような肉付きもなく、女性としての胸ですら、控えめな小山が浮かんでいるだけです。そのため、ボリュームの足りない乳房に対して、既に一人前に成長を遂げた乳首がやけに大きく見えてしまいます。

大人しい胸部と比べれば、腰は女らしくほっそりしています。そこから流れる下腹部は、やはり女性にしては控えめでした。とはいえ、大胆にV字開脚された中央には女性特有の割れ目が走っており、そこから染み出しているものも、王女とまた同じものなのでしょう。

この二人が同じ性別だということが信じられない身体つきではありませんが……

「ふわぁんっ♡」

このように、乳首に舌を付けた時の反応はとても似通っています。

「んっ、ん……いいのっ……それ……好き……♡」

妹は、僕の動きに一つひとつ素直に性感カシしてくれているようです。

「お兄ちゃんのお気持ちいい……っ！ おまんこもお指でクリクリしてよお……♡」
改めて開きっぱなしのソコに指を差し入れると、先ほどとは比べ物にならないほどの温水が溢れてきました。裸になり、足を開き、胸を弄られることで、彼女の身体は僕を受け入れるための準備をちやくちやくと整えつつあるようです。

最後の一押しとして、割れ目の隅にある、最も入り組んだところをギュッと押し込んでみると……

「はあっ……んっ！ クリちゃん気持ちいいっ！ もっと！ もっとしてェ!!」

V字に掲げられていた爪先は今では力なく垂れ下がり、M字状になっていました。

その膝下は、僕の指の動きに合わせて、ビクン、ビクンと不自然な振り子のように揺れています。

「お口もサボっちゃダメえ……おっぱいペロペロしてよお……♡」

下に気を取られるあまり、口の中がお留守になっていたようですね。お詫びに、敏感なところには親指を残したまま、人差し指を彼女の奥へと差し込んでやりました。

「ふわっ!? あっ……そこっ……腔内なかっ……気持ちいい……っ！

唇の動きも休まず、両胸とクリトリスに腔内、と彼女が求めるところすべてに力を注ぎこんでいきます。

その甲斐あってか――

「欲しい……欲しいよお……おにーちゃんのちんちん、おまんこに挿入れてえ……」
 両手両足で、僕の身体にしがみつくように抱きしめてきます。背後には傷心の王女
 が蹲っているというのに……どうして僕の身体は……こうなのでしょう……っ！

「あっ……！ ああああああっ！！ ちんちんっ！ ちんちんキてるう……っ♡」
 今夜を穏便に過ごすため、と自分に言い聞かせながら、僕は自分の恥骨を妹の恥骨
 に合わせてゆきます！

「おまんこっ！ おにーちゃんのちんちんでいっばいっ！ あっ、あっ、あっ、あ
 っ、気持ちいいよおお……！！」

僕の背後に回されていた両腕からも力が抜け、僕の一撞き一撞きにビクン、ビクン
 と腰を震わせるばかりです。

「しゅっ……しゅごっ……しゅごいのお……ちんちん……ちんちんらしいしゅきい……
 ……♡」

頬まで涎が垂れていることにも気付かないほど、彼女は下から駆け巡る快感に夢中
 になっています。もっと強く味わいたい、と元々小さな膣内は、更に収縮してゆき、
 子宮の中に先がめり込んでいます。

「ふわあん♡ もっと、もっとお！ 絶頂トびそう！ 絶頂トびそうだよっ！ あたしっ、

絶頂^トんじやうううっ！」

ギユウウウウウ、と彼女の身体に締め付けられると、僕の身体も長くは耐えられそうにありません！

「妹^{ホト}っ……僕も射精^{イキ}そうだ……っ！」

彼女は半分くらい絶頂^{イキ}かけていますが、それでも意識は何とか保っているようです。

「おにーちゃんっ、今日は膣^な内^かダメだよ!! 膣^{そと}外^とに……抜いてえ……っ！」

必死の懇願にも耳を貸さず、僕は腰の動きを速めていきます。最後の、最後まで……っ！

「ひやつ、はっ、ああああああああん……っ！」

ドクンっ！ ドク、ドク、ドク……。

彼女には悪いですが、そのまま膣^な内^かで果てさせてもらいました。

「あ……おにーちゃんの精液だ……熱いよお……気持ちいよお……これえ……らしいゆきい……っ♥」

直前までは嫌がっていたものの、いざ膣^な内^かに射精^だされると、その温かさをじんわりと実感して、悦に浸っているようです。

さて……。

全身を痙攣させて身動きの取れない妹から自分の身体を抜き出し、ベッドの隅の布団の塊に声を掛けました。

「トリイ……ごめん、その……お待たせ」

その身を包んでいた毛布の隙間からニュツと伸びた彼女の腕がしなり、不用意に顔を近づけた僕の頬をその手の平でパチンと引つ叩きます。

そして、掛け布団の殻を豪快に破り、生まれたばかりのような肢体が僕の胸へと飛び込んできました。

「うっ……うううう……くうううう……っ！」

泣きたいのを堪えようとして、それでも涙を抑えきれず——やり場のない憤りが僕の胸に伝わってきます。

実を申しますと、僕たちは、その……恋人としての契りを結んではないのです。

片や王女陛下、

片やその側近。

そんな二人の恋愛関係が表沙汰になれば面倒なことにはなりません。

ただ、それだけでなく、彼女の気質というか、意地というか……いわゆる「ツンデレ」などところがありまして、彼女からは決して恋人として堂々とは甘えたがらないのです。いつでも上から視線で、僕のために付き合っただけでやっていると、という体裁を保とうとしております。

今も、本当は僕を責め立てたいところなのでしょうけれど、どうやっても責める言葉が見つからず……かといって突き放すこともできず、苦悶しておられるのでしよう。こういう時は、言葉では何も解決しませんね。

僕は彼女の涙に濡れた頬にそっと両手を添えると、胸から彼女の顔を引き離しました。そして、彼女が両目を閉じたのを見届けてから、自分の口先を彼女に近付け……「あつ……こら……オニーチャーン……」

傍では妹からの気の抜けた抗議が飛んできますが、僕たちは構わず舌を這わせ合いました。

そうしているうちに、彼女の身体にも熱が蘇り、力なくされるがままだった両腕は、今ではしっかりと僕の襟首に回されています。二つの胸も、しっとりとした股の間も、僕にぴたりと寄り添わせて。

「ダメえ……ダメだったらあ……やめろお……」

気力を取り戻した王女は目を開きました。そこで彼女が見たものは……大の字にな

つて頭だけこちらに向けて涙目になっている妹の寝姿だったのです。

「んん？……フツ」

彼女の異変に気付いて、王女の口元が意地悪そうに歪ませました。

「あらあ……ライクったら……二回も抜いたのに、まだまだ元気そうじゃない？」

王女、妹、と二人の蜜壺を泳ぎ回った僕のマドラーに、王女はペロリと舌を這わせ
ます。

「あつ！ お兄ちゃんのちんちんに触るなつ！ それは……あたしのだつ！」

と睨みつけますが……事前の勢いは欠片もなく、今はただの口先ばかり。

「ああ、ライクのおちんぼ美味しいわあ……。貴女も舐めたいの？ こっちにいらっ
しやい♪」

妹の方に厭らしい視線を投げかけながら、王女は二人分の愛液の染み込んだ僕の肉
の塊を小さな唇ですっぽりと包み込み、舌と唇で隅々まで刺激し始めました。

「うっ……くう……」

酷使し続けて感度が増している僕は、王女の舌の前に、声を堪えきれません。

「やめてよお……あたしもおにーちゃんのちんちん舐めたいよお……お口にだったら、
いっぱい射精だしてくれていいの……」

どうやら妹は、飲精する分には問題ないのですが、子宮に精液を注がれると、身体

の自由が利かなくなるようなのです。

膣内射精——それが、彼女を無力化する唯一の方法であり、僕が知りうる彼女の唯一の弱点といえましょう。

とはいえ、彼女自身の性感的には膣内射精を求めており、本人にとっても悩ましいところのようですが。

少なくとも、このように第三者がいる前では、情けない体たらくを晒したくはなかったことでしょう。これについては、勝手に部屋に飛び込んできた罰、ということでした承願いたく思います。

物欲しそうに眺めるばかりの妹を尻目に、王女は僕の足の上で、頭を上下に揺らししています。根本から先まで、彼女の舌が行ったり来たりしていて、第三の波が、僕の奥から込み上げてくるのが判りました。

「トリイ……僕……もう……っ！」

口の中にそのまま射精したい……！　と思った矢先に、彼女の頭から僕は開放されてしまいました。温かな彼女の中から外に放り出されて、夜の空気の冷たさに軽く身を震わせます。

「貴女、さつきライクの精液飲みたい、って言ってたわよね？」

王女からの問いかけに、

「うんっ！ あたし、お兄ちゃんのものちんちんジュース大好きっ！」

大の字になったまま、恥ずかしげもなく答えました。

「それじゃあ、飲ませてあげてもいいけど、器が必要よねえ……？」

僕の股を目掛けて四つん這いになっていた王女は、そのままズルズルと妹の顔の方へと近づいていきます。

「いらぬいよ！ ちんちんから直飲みすればいいんだもんっ！」

妹の話は聞かず、王女は寝そべっている妹の上を通過して——ピタリと止まりました。真下に顔を残したところで。

「ライク、今すぐ挿入れて頂戴！」

「ここぞっ!？」

そう反論したのは僕ではありません。妹です。

同性の割れ目を顔のすぐ上に掲げられた彼女は、それでも何一つ抵抗できません。

「私の膣内なかに移してからたっぷり飲の精めませてあげるわ。注ぎ込まれる過程かまでしっかりと見せつけてあげるから……覚悟しなさい」

「う……ぎええ……嫌だよお……そんなの……」

静かになった妹はさておき、この場を丸く収めるには……今度は王女に付き合わなくてはならないのでしょうか……。

妹に見守られながら、今夜三度目、王女には二度目の欲情が始まろうとしています。これで済めば良いのですが、その頃にはそろそろ妹の身体にも自由が戻ってそうない気がしますし……。

いつまで続けられるのでしょうか……この狂宴は。

うぐぐ……昨日はホント酷い目にあつたよ！

折角お兄ちゃんのお泊りが一日延びたのに、なーんかコソコソしてるからおかしいなあ、と思つて部屋を訪ねてみたら……やっぱりだよ！ あんな早くにお兄ちゃんが寝ちやうなんて変だと思つたわ！

それで、あたしはパジャマのまま表に出て、お兄ちゃんの部屋の下から、1・2の3つ!! で大ジャンプ！ お兄ちゃんの部屋の窓枠に手を掛けて、シャーっと入り込んだワケ！

そしたらおつたよ、おつた！ 悪い虫が!!

いっつもお兄ちゃんのこと、仕事ガー仕事ガーつつーて独り占めしてた悪^{わる}王女^{おうじよ}が！
アイツ、ヘタレなんだよね！ お兄ちゃんの帰りが一時間遅れただけで、寂しくて

ご飯も食べられなくなっちゃうよーなヤツだもん！ その王女が三日もお兄ちゃん手放した上に、更に一日追加！ なーんて耐えられるわきやねーわな。

てな感じで、最後の一夜はお兄ちゃんの安否を確認しつつ、何もなければ一緒のお布団で過ごそうと画策していたあたしの目論見はパーになってしまったのでした！！
アイツさえいなければ、おまんこに一発射精もつてとろんとしたところに二発、三発と続け様にお臆ないっばいにしてもらえたのに！

いやー……お兄ちゃんの精液は好きだけどさあ、口移しは勘弁だよ……。それも、あの女の下の中から移されたのなんて！

アイツ、ビチャビチャ飛び散る王女汁があたしの顔に付くくらい間近でやり合った後、あたしに飲精のませようと無理矢理おまんこ顔に擦りつけてくるんだもん！

キモいわ！

あたしに百合趣味はないっつーの！

男だって、お兄ちゃん以外興味ないのに！

お兄ちゃんの精液パックなら大歓迎だけど、不純物混ざりまくりだもん！

サイアクじゃー！！

この恨み、晴らさでおくべきか……ッ！

ということで、忍び込んでまいりました宰相官邸。お兄ちゃんの仕事場ベッドルーム！ 仕事が終わったらいつものまま寝る、ってお兄ちゃんゆってたもんね。

確かに……ああ、あったあった。一人用とは思えないダブルのベッドが。コレ、絶対王女が用意したモンだよ。自分も一緒に寝るために。

そして、ベッドの下に潜んで待つこと数時間。結構遅くまで、お兄ちゃんも含めてひっきりなしに色んな人が出入りしていた後は、黙々と机に向かって何かしてたみたい。ここからじゃ何をしてるのかよくわかんないけど。

で、あたし自身がウトウトしてきた辺りで、お兄ちゃんはどうやく一段落ついたらしく、ベッドの中で横になったご様子。もう襲っちゃいたいなー……とワクテカしてたけど、もう少ししの辛抱。絶対アイツもやってくるから……！！

そこに、申し合わせたように無断で入ってくる気配が。お兄ちゃんが鍵も掛けてたはずなのに……合鍵まで持ってるんかい！

「ラ〜イ〜クっ♥ 夜遅くまでお疲れ様〜♪」

フンっ！ 絶対今夜はやってくると思ってたよ！ 昨晚、中途半端に欲求不満にさせられたのはあたしだけじゃないからねー！

軽い足取りがお兄ちゃんのベッドまで近付いてきたところで……あたしはすかさず

グレートな某昆虫のように暗い部屋の中に音もなく這い出した!

こんなところに他に人がいるとも思ってたようで、王女ヤロウはお兄ちゃんに夢中。こちらにまったく気づいていない無防備な背後に忍び寄って……えいやっ!

「!?」

口を塞いで腕を捻ったなら、そのまま背中で用意していた手錠をカチャン。あ……こういうの、前もやったよねえ……あたし。

「ん……? あー……? ……ホト!?」

あたしどころか、王女が来たことにすら気付いてなかった微睡み気味のお兄ちゃんは、あたしたちが揉み合ってる様子をようやく状況把握。もしかして夢じゃないか、って現実を疑ってアチコチ見回してる。

お兄ちゃんも起きたところで、あたしは王女様に改めてご挨拶を。

「昨日はおまんこジュースをご馳走してくれてありがとう。今夜はあたしからご馳走してあげようと思ってね!」

「貴女……こんなことしてただで済むと思ってるの……!?」

王女は結構本気で大激怒。

それに対してお兄ちゃんも結構本気で大困惑。

「しかし陛下……僕の身内がこんなご無礼を働いたとあっては……」

……あ、そっか。そこまで考えてなかったわ。あたしの思惑は、お兄ちゃんの真心クウオリテイが不可欠かも……!!

お兄ちゃんから頭を下げられた王女は不満げに鼻を鳴らして一言。

「いいわよ。ヤリなさい」

ベッドの脇にドカンと腰を下ろして見物態勢。

「しかし……陛下……」

心配そうに王女のご機嫌を伺うお兄ちゃん。でも……あたしが言うのもアレだけど、どう考えても取り返しつかないって。今夜は大人しくあたしを抱いちゃいなさい！

「ライク、しばらく安眠できる夜は訪れないと思うことね……!!」

そんな悪態つきながらも、結局抱かれたいんだ……気持ち解る。

「それと、ホト！」

今度はあたしに。

「次やったら、本気で消すからね……!!」

「やめて下さい！ ホトと軍が全力でぶつかったら国が傾きます！」

まあ、戦車の一台や二台、千切っては投げ、千切っては投げしてやるけどさ、あんまお兄ちゃんに迷惑かけるのも悪いから、こういうのは今回だけにしといてあげるわ。

こんな風に忍びこむのはもうやんないけど……次はどうやって潜入してやろうか。

あのさあ……お兄ちゃんが帰ってこなくて寂しいのは……アンタだけじゃないんだからね!!

そして、パコパコしてもらった結果……

あたしのおまんこシェイカーに精液カクテルを射精そそいでもらったところまでは良かったんだけど、バーテンダーたるあたしが、そこで力尽きちゃったんよね……。

ということ、残念ながら王女に特製カクテルご馳走することは叶わず、気持ち良くて腑抜けたところであたしは箱詰めカクテルにされて孤児院に送り返されたのです。

でもコレが結構楽しんだから、今度はコレで潜入ボックスしてみようかな？
人呼んで、プリティ妹お届け便！



ア ス ト ラ ル リ ア ン ズ

兄は指揮官に妹は銃殺刑に

小さな島国ネイザーランドで
ある日突然内戦勃発!
反抗勢力優勝につき、
政府転覆大成功!!
しかし……
敗北した旧政府の残党は
新政府の女王を果敢に拉致!
これにより一発逆転を目論むが……

新政府軍の警備兵である兄と
旧政府軍の首謀者である妹。
ふたりの自己都合が工作する
陰謀豊かなお手軽コメディ!?

テロリスト
反逆者
プリンセス
迫り来る反逆者
担がれる民間人
そして…アホの子
掻き乱す問題児!

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/astra/01/>

露出少女と痴女の
モラルなき戦い!

裸族忍者シリーズ

いつでもどこでも脱ぎたがる
露出少女・埋竹礼菜
大好きな男と子供を成すことに
人生を懸けて迫ってくる痴女・鷹池。
そんな三人に翻弄され続ける
流され男子の痴情まみれの官能ライトノベル!



大学生編
その2
2017年3月
公開予定

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/ninja/>

オンナ
たぎる♀に

おびえる♂
オトコ

乳を出そうが、尻を出そうが、
女の身体は贅肉扱い。
一方、成人向けコーナーには
半裸の男優ポルノがズラリ——
女が迫り、男があしらう、
そんな世界があったとしたら……？
価値観・身体づくり・社会システムに至るまで
真面目に考えてみた物語です。

リビド〜
男女の性衝動が反転した社会とは
リバ〜サル

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/rev/>

僕と私の 露出日記

The diary of Sleeping under the stars for Ours

自然の中で育ち、
裸で野山を駆け回るのが
好きな少年。
非日常を求めて裸になり、
その快感に
目覚めてしまった少女。
孤独に背徳的性欲を
膨らませてゆく二人だったが、
ついに――

立派に 育った 露出癖

わたしとあなたの 露出交換日記

スピンオフでも 野外で全裸!

野外で裸に
なりたい男と
他人の痴態を
覗きたい女。

出逢ってはならない三人が
出逢ってしまい――

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/outdoor/>



未知なる世界で
どう生き延びる...?

それが彼女の生存戦略!

seizon senryaku

学校が異世界に飛ばされた!?
それでも見知らぬ大地の上で
誰もが遅しく生き延びてゆく。
ある者は『力』で、
ある者は『智』で、
ある者は『心』で、
ある者は『愛』で。
そして.....
彼女たちは元の日常に
帰ることができるのだろうか.....!?

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/4girls/>

正義の投与の行く末は
いじめられっ子の処方箋

添牙いろは

イジメ撲滅運動——
とある高校で突如始まったこの騒動に
埋竹雛菊は意図せず巻き込まれていく。
しかし……

そもそも、イジメとは何なのか？
そんな疑問に突き当たる。
悩み抜いた末に、辿り着いた結論とは……？
そして、運動を取り仕切る
学級委員・雨弓来禾の真の目的とは……？
イジメと向き合うすべての人に送る一冊です。

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/presc/>

平和を取り戻したネイザーラントに
まさかの第二次戦争勃発!?
その名も…
お兄ちゃん争奪戦!!
トイレで
執務室で
挙句の果てには道端で…!?
お兄ちゃんに迫り続ける
パラレルワールド短編集を
お楽しみください!

空色書房

Shirogata Shoten Co. Ltd.